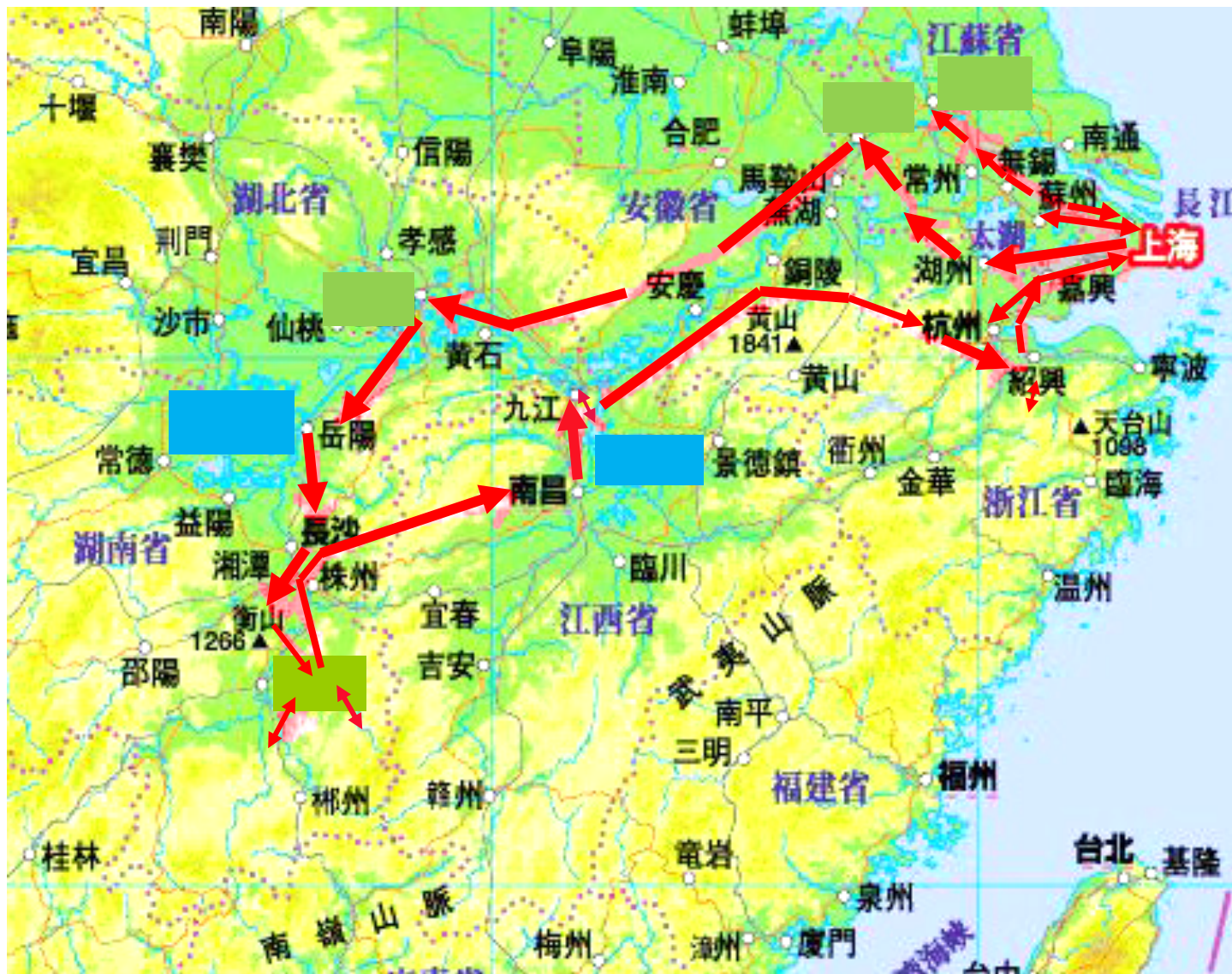


2013年秋・春野かそい

この3年、中国（主に華北、華中だけだが）を旅して、デモなどに一度も出合つたことがない。反日どころか、いたるところで日本人として歓迎された。若者たちは優しく、中国の未来は明るい！以下、見たもの、感じたこと、考えたことの、ほんの一部だが、書き記そうと思う。



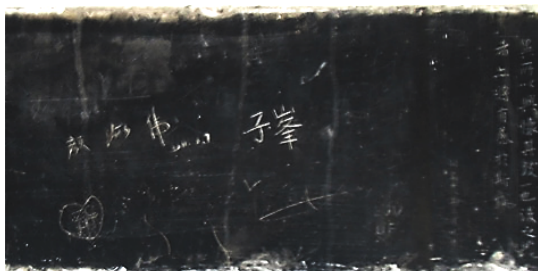


焦山へ

渡し船で焦山へ。



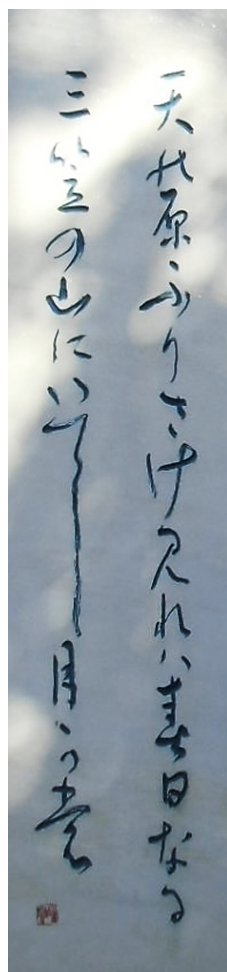
焦山碑林 後方に万佛塔が見える。



碑林の中の碑に書かれた落書き。「峯子」と読めるが、日本人だろうか。落書きはあちこちの碑林で見かけた。情けないことである。

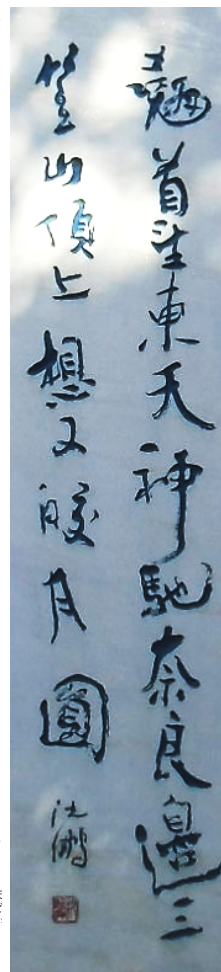


米芾の書の石刻



天能原 神は馳す 奈良の邊 三笠山頂の上 思ふ 又た皎月の圓なるを
ふりさけ見れ 春日なる 三笠の山に いてし月可裳

首を翹げて東天を望めば 神は馳す 奈良の邊 三笠山頂の上 思ふ 又た皎月の圓なるを



阿倍仲麻呂の碑
碑には、和歌とその漢訳の詩が刻されている。
西安にも、同じ仲麻呂の碑がある。



寺の高台からは、すぐそこに長江が見える。水平線の彼方は日本である。



北固山の甘露寺

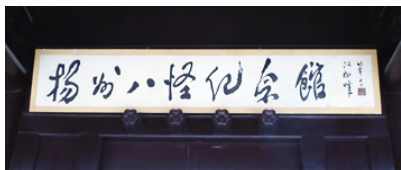
10月15日、上海虹橋火車站から高铁で鎮江に向かう。「火車」は日本では鉄道のこと。
鎮江の焦山にある「瘞鶴銘」を見ることが目的である。
焦山は揚子江（長江）に浮かぶ小島で、焦山には船で渡らねばならない。
焦山に行く前に、米芾の書と阿倍仲麻呂の碑を見るために、北固山の甘露寺によった。
鎮江は、米芾が30代から住んだところで、彼の終焉の地であり、墓もある。
甘露寺の石段を登っていくと米芾の書と、その横手に仲麻呂の碑があった。



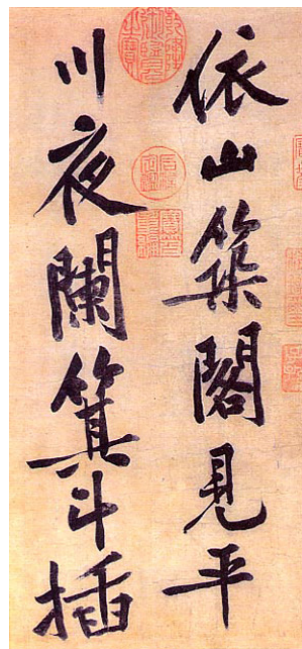
揚州市と鎮江市を結ぶ潤揚長江大橋（全長約36キロ）が開通しているの、ここを渡るバスで揚州まで行くこともできる。



細い路地の先の民家街の中に揚州八怪紀念館はあった。通学の子も達とその保護者達で紀念館前は大騒ぎだった。



長江をフェリー（料金は3元）で渡り、対岸の揚州へ。フェリーは5分ほどで対岸に着く。対岸からは少し歩いて、路線バス（「公交」という）で揚州の市街へ。翌日、目的の「揚州八怪紀念館」へ行った。



黄庭堅「松風閣詩卷」部分



「板橋書屋」ここに1年ほど鄭燮（鄭板橋）が住んでいた。



万佛塔から見た広大な長江



瘞鶴銘・拓本（部分）



この中に瘞鶴銘がある。



5個の石片が、コンクリートの崖に、はめ込まれて展示されている。

えいかくめい 瘞鶴銘 南朝の梁（514年）

5寸大の大字楷書体。

鶴の死を悼み、そのなきがらを瘞めたことを記念して刻された。

書者は王羲之説、顔真卿説、陶弘景説などがあるが、陶弘景説が定説になっているようだ。



荒金先生と表具担当のチョウさん



18日の午前中時間があつたので、劉海粟美術館に行ったが、何もない所であつた。無駄足を踏んで、意気消沈し、昨年、西安の大雁塔で買いた求めた雁塔聖教序の拓本を表装してもらうために、博印堂によつた。そこで、思いがけない人に出会うことになったのである。

その人は別府大学の教授で荒金大琳さんである。ずいぶん昔、雁塔聖教序の研究をしているころ、この先生の論文に出合つて、一度でいいから教えをこいといと強く願つたことがあつた。それから何年が過ぎただろうか。たまたま雁塔聖教序を、安く、しかも中国風に表装してくれるであろうと思ひ、日本から拓本を持つて行つた博印堂に、雁塔聖教序の碑をじかに研究した、日本人で唯一と思われる先生が、帰国直前に、15年らしい付き合いがあるのである。たしか、「大学の先生ですか」「いいえ」「雁塔聖教序がお好きなのですか」「書の基本と思ひ学んでいます」「これは摸刻拓だとご存知ですか」「はい知っています」「分かつた上で表装されるのですら、言うことはありません。そうだとすると、この拓本はよくできていますよ」・・・と初対面の僕との会話である。研究資料を送ってもらうことを約束して別れたが、この出会いだけで、今回の旅の収穫は十分であると思つた。

思いがけない出会い

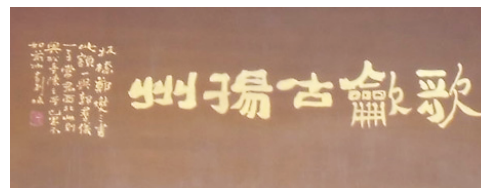
明日（18日）の午後、上海で同行者の皆さんと合流するため、早めに揚州をあとにし、バスで上海へ（所要時間約4時間）向かつた。同行者の皆さんと合流してからの上海・蘇州・杭州の旅については省略。



境内には揚州八怪の碑廊がある。



らへい 羅聘書「冰壺秋月」



きんのう 金農書



樹齢730年の銀杏の樹がある。

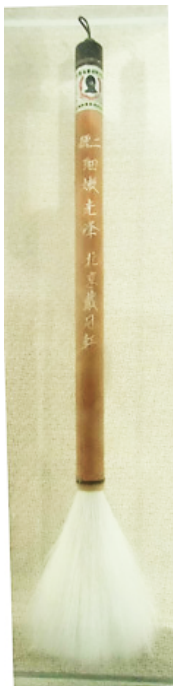


金農（金冬心・1687～1762?）が揚州に滞在したとき、度々寓居した西方寺が揚州八怪紀念館になっている。ここで金農は亡くなった。ここには金農のアトリエや寝室、応接間などが残されていたが、暗すぎて何も見えなかった。境内には揚州八怪の碑廊があるが、肉筆作品はみつからなかった。



金農の寓居跡

西方寺の近くには羅聘故居や鄭板橋の仮寓先や汪士慎、高翔の家があるらしいが立寄りなかった。



南朝・梁元帝代 (551 年頃)
金・銀・竹筆



湖筆の伝統筆「玉蘭蕊」
善璉湖筆廠制作

※善璉鎮は湖州市内からバスで約 1 時間半の郊外にある、「筆都」として名高い田舎。ラベルは善璉湖筆の象徴である「双羊牌」。筆の品質は、急速に悪化しているという。



中国湖筆博物館

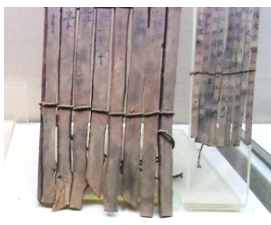
戦国時代から現代まで、時代別に、筆の歴史が、実物の筆とともに、解説されていた。



長沙左家公山出土戦国楚筆（長沙筆）
(紀元前 300 年ころ・兎毫・筆管は木、長さ約 17 cm、
鋒長 2.5 cm、管径約 0.3~0.4 cm)



湖北睡虎地出土秦代竹管筆



居延木牘冊と湖州出土漢代の書刀（削刀）



前漢~後漢・居延筆

「中国湖筆博物館」は王一品筆莊が開いた別名「趙孟頫藝術館」という。市内に王一品記念館が建設中だった。



趙孟頫故居紀年館



ここで趙孟頫が暮らしていたらしいが、見るべきものはなかった。若い (20 歳くらいか) かわいい女性の学芸員が日本人が来たと知って、片言の日本語で何度も話しかけてき、展示物の解説をしてくれた。日本が大好きらしく楽しそうだったのが印象的であった。上の写真の下のは、月河橋から見た記念館である。橋には顔真卿か何紹基風の字で橋の名が書いてあった。橋は簡体字。



21 日、同行者の皆さんと別れて、長距離バスで上海から湖州（こしゅう）へ向かう。湖州は湖筆発祥の地であり、趙孟頫（ちょうもうこう）の故郷でもある。目的は湖筆博物館と趙孟頫紀念館の見学である。太湖三白（白魚、白蝦、カワヒラ）も食らう。



静かな中庭がある。



高鉄宜興站前から路線バスに乗り国山站で下車。



国山めざして田舎道に行く。



畑の中に行く。

宜興での目的は「**禅国山碑**」を見ることがあった。なかなか碑のある場所が見つからず、山で道に迷い、歩き回って、農民らしき人たちに道をききながら、やつのこととて、誰も来ないような小さな山の頂近くにある碑亭に辿り着いた。しかし、碑亭には鍵がかかっていて、窓格子のすきまから碑の写真を撮るのが精一杯であった。



中国宜興陶磁博物館



紫砂壺

宜興は**紫砂壺**（日本では紫泥急須という）で有名な陶磁器の街である。陶都とも呼ばれる。宜興窯は中国八古窯の一つであり、今は郊外の丁蜀鎮を中心に作陶されているらしい。丁蜀鎮には宜興市街からバスで（30分ほど）行ける。丁蜀鎮には「**中国宜興陶磁博物館**」があった。



徐悲鴻紀念館



「田横五百士」197×349 cm



「猷我后」



2013/10/22

宜興は画家の**徐悲鴻**（1894～1953）の出身地である。
徐悲鴻紀念館で代表作の「田横五百士」などを観ることができた。

湖筆博物館を出て、趙孟頫が造ったという庭園（蓮花莊）を見学してから、バスで**宜興**（ぎこう）へ向かった。



日本語の案内板などがあった。



二階から中庭を見る。

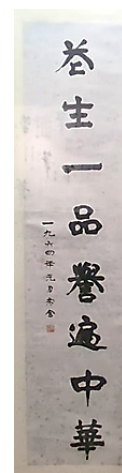


湖筆博物館の外の通りには、善璉湖と書かれた筆屋が軒を連ねている。
筆づくりの実演も通りから見るができるが、作っている人は専門の職人ではなさそうである。

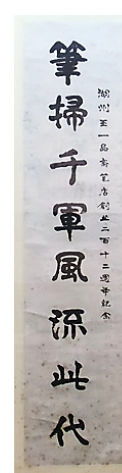


館内に「趙孟頫芸術館」がある。趙孟頫の代表作の複製など、彼に関する多くの資料が展示されている。

筆一本で千軍を一掃しこの世を堂々と歩む。
力強い王一品の筆がその名声を遍く全中国に響かせる。



老舎の対聯（1964年にここを訪れた時の作）



吳昌碩用筆
「仿古提筆」
邵芝岩筆莊



吳昌碩用筆
「缶廬」筆
李鼎和筆莊制

高鉄（高速鉄道のこと、中国の新幹線）宜興站（站は駅のこと）にもどり、高鉄で南京に向かった。南京での目的は南京博物院を見学することであつたが、南京博物院は2年前と同じく、改修工事中で閉館していた。何年工事をするつもりなのか！
 しかたがないので、中山門を見て、だだっ広い明孝陵に行くことにした。そのあと、南京市博物館により、高鉄で早めに漢口（武漢ともいう）へ移動した。（10月24日）



「禅国山碑」拓本 部分

封禅国山碑（三国時代の呉・276年）
 書体は非常に奇異な篆書体。「呉篆」とも呼ばれる。石の全面に刻されている。1行25字、全43行。書者は呉の蘇建といわれる。呉の最後の皇帝孫皓が、お告げを信じ、呉を称えて封禅の儀式を行ったときに建てられた碑。しかし呉は4年後に滅亡した。文章の内容も書風も異様な碑であるが、呉の碑は珍しく、「天発神讖碑」とともに貴重なものである。

「国山碑」「禅国山碑」とも呼ばれる。



封禅国山碑（また国山碑などと呼ぶ）
ドアの隙間から撮ったもの。正面か。



ガラス窓越しに
撮ったもの。側面か。



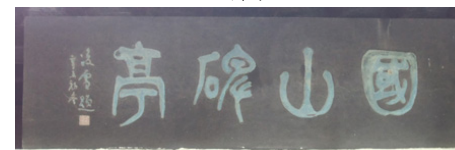
入口の門（誰もいない）



門の題額「国山碑院」



碑亭



碑亭の題額



国山山頂付近からの眺望



道なき道を行く。本当にこの道か？



道らしくなってきた！



石段と鳥居だ。間違いない！



鳥居を過ぎて、さらに登る。



湖北省博物館

入館料は無料。多くの市民が訪れていたが、マナーが良くないのが残念。旧石器時代から現代までの、約 20 万点の文物を収蔵。ここには特筆すべきものとして、楚の遺跡から出土した曾侯乙墓出土品や郭店楚簡、越王勾践剣などがある。



曾侯乙墓は擂鼓墩 1 号墓ともいう。戦国時代初期の墓。1977 年湖北省隋県で発見された。

曾国の君主曾侯乙の墓。楚の恵王 56 年（紀元前 433 年）頃墓葬されたい。



黄鶴楼

「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之を送る」という李白の詩で知られている所。観光客だらけだ！脱出！

武漢（漢口）は街の中を長江が流れている。李白（37 歳のころ）は黄鶴楼に登って、先輩の孟浩然が乗った、長江を下ってゆく帆船を水平線の彼方に消えるまで見送ったのである。別れは切ないなあ。



東湖

広い東湖のほとりに湖北省博物館がある。岸辺をゆっくり歩きながら博物館へと向かった。

「湖北省博物館」へ行く。
南京南站から高铁で漢口站へ。翌日（10 月 25 日）「武漢博物館」はあきらめて、「黄鶴楼」「東湖」を見ながら、



ちょうてんきゆう 朝天宮

ここが「南京市博物館」



南京市博物館の中



呉昌碩や張大千の作品などもある。

金水橋は又五龍橋とも呼ばれ、陵宮と同じ南北中央線にある。橋体は石構造のシングルアーチ様式で、元々は橋が五つあり、真直ぐ北の 200メートル離れたところにある五つの陵宮門とそれぞれ対応していたが、現在、三つしか残っていない。橋の土台と兩岸の石堤は原物である。

2013/10/24

いたるところに、日本語による解説板が置かれている。



ラクダやゾウや麒麟など 6 種の石像のある西北方向の石像路神道を過ぎると、巨大な神功聖徳碑碑楼がある。



「大明孝陵神功聖徳碑」明・1413 年

永楽帝が、父である朱元璋の功績を称えるために建てた碑。高さ 8.78m？全文 2746 字。

この碑には、清朝末期にここを訪れた外国人の落書きが残っている。明孝陵には落書きをするな、と六か国語で書かれた石碑もある。



南京の中山門

1937 年 12 月 13 日、この門より日本軍が南京に入城し、南京を占領した。



石望柱

この南北方向の神道のずーと先に孝陵がある。



孝陵

明孝陵は、明の太祖洪武帝朱元璋とその皇后馬氏の陵墓。南京一の大きな墓。中国全体でも最大級の墓であるらしい。

大きさには、きりが無いなあ。



碑廊

祝允明や鄭燮や石涛などの書が刻まれていた。



岳陽楼

杜甫の「岳陽楼に登る詩」で知られるが、北宋の文人范仲淹 (989~1052) の「岳陽楼記」のほうが有名である。境内には碑廊があり、この散文をはじめ 100 編以上の詩文が刻まれている。



岳陽楼から洞庭湖を望む

もとは中国最大の湖だったが、この 100 年で面積は半減し、現在は中国第 2 の淡水湖らしい。長江とつながっていて、その面積は長江の影響で変化する。通常は琵琶湖の 4 倍ほどだが、増水期には琵琶湖の 28 倍にもなるらしい。長江から洞庭湖を通り長沙まで大型の船が行き交っていた。



岳陽楼の中には范仲淹の「岳陽楼記」の全文 (360 字) が書かれている。その中の「天下を以て己が任となし、天下の憂いに先んじて憂え、天下の楽しみにおきて楽しむ」はよく知られ、「先憂後楽」は後楽園の由来でもある。蘇州站の前の広場に、この言葉と范仲淹の巨像が置かれていた。



境内の樹木の名前に片仮名の表記！

武昌站から鉄道で岳陽に向かい、翌日 (10 月 26 日) 岳陽楼に登り洞庭湖を望む。碑廊や樹木を見て、岳陽火車



曾侯乙编磬

中国で最も古い打楽器で、メロディを奏でるための楽器。

磬は石灰岩や大理石で作られている。これは 32 枚の磬が青銅製の枠に 16 枚ずつ二段に懸けられている。枠の高さ 109 cm、長さ 215 cm。

台座の怪獣は、頭は龍で身体は鳥、足はスッポンである。一つが 25kg。

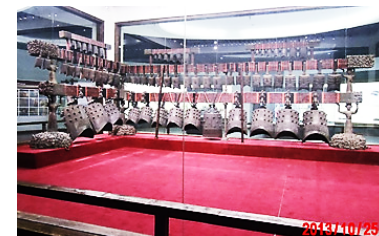


撞钟木棒 (長さ 215 cm、径 6.6 cm)



敲钟木槌

博物館内には、「古代楽器演奏ホール」があり、ときどき古代楽曲などが複製品で演奏されるとのことである。



曾侯乙编钟

编钟は古代中国の打楽器で権力の象徴でもあった。

鐘の数 65 点、三層八組に分かれ、最大の鐘は高さ 153.4 cm、重さ 203.5 kg 最小の鐘は高さ 20.4 cm、重さ 2.4 kg。编钟の総重量 2567 kg、编钟を支えている台は高さ 265 cm×長さ 748 cmで、人形柱などの装飾品の総重量は 1854.48 kgである。5 人で演奏したという。

音階は五音・六音・七音音階など、音域は 5 オクターブ半。

编钟や台などに、合計 3755 文字の銘がある。これにより西周初期以前に平均律が成立していたことが証明された。



2013/10/2



2013/10/27

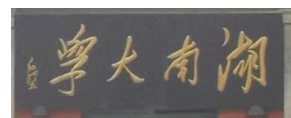
朱熹の筆になる石刻



乾隆帝筆の扁額「道南正脈」
イライラする書である。気持ちが悪い。



門のない湖南大学



毛沢東書の題額



湖南大学の中央に建つ毛沢東像と明るい学生たち。



2013/10/27

岳麓書院

湖南大学敷地内の岳麓山の麓にある。

北宋の976年の創建で、宋代の四大書院の第一にあげられる。また世界最古の大学ともいわれる。1926年に湖南大学と名付けられた。

南宋の朱熹(1130~1200)がここで講義をしたことで知られるが、受講生は千人を超えたといわれる。朱熹の筆になる「忠孝廉節」などの大きな石刻や乾隆帝などの扁額があった。

岳麓山は南門から登り、^{がくろくしやいん}岳麓書院とそこの中にある^{ろくざんじ}麓山寺碑、また岳麓山中にある^{ろくざんじ}麓山寺や^{うひ}禹碑を見て東門から下山した。標高300メートルほどの小山だが、人に尋ねながら、登ったり下りたり、汗みどろになって山を歩き回ったが、知っている人がいないようで、目的の石碑を見つけた時は涙が出そうになるくらい嬉しかった。長沙は春秋戦国時代、楚の都であった。朱熹がこの地で教え、また毛沢東の生誕地でもあり、清末の革命揺籃の地である。朱熹が教えた「岳麓書院」の地には現在、湖南大学があり、毛沢東の巨大な像があった。

翌日(10月27日)湖南省博物館に馬王堆漢墓出土文物を見に行ったが、工事のため閉館中であった。
しかたがないので、路線バスで^{しやう}湘江を渡り岳麓山へ行く。
岳麓山とは南岳衡山の麓にあることから、つけられた名だという。



湖南省博物館
2015年まで拡張工事のため閉館。



長沙へ。

歩道にチョークで文を書いてお金をもらう障害者(岳陽市)



K列車で長沙へ



刺繍で書が再現されている(高価!)



湖南名物の湖南刺繍と菊花石彫りと赤い磁器。ぶらぶらと店をひやかして回る。



鉄道の窓が汚すぎて、湘江がよく見えなかった。
瀟湘八景の地に來たが、何もかもがうす汚れて、水墨画の世界は何処にいったのか。



勝利坊を通り山頂へ。



衡山の最高峰の祝融峰（1298m）からの眺望。
登るほどの山ではなかった。

翌朝（10月28日）早く、長沙駅から鉄道で湘江を眺めながら衡山へ向かった。



禹碑 部分

この碑は、中国最古の石刻といわれる。いつのころか分らないが、南岳衡山の岫巖峰に建てられたと考えられている。

最近、30年ほど前に衡山の近くの農民が発見した大岩に刻まれたものが、禹碑の原碑だと確認されたという。

この碑は宋代に失われたが、南宋の1212年に何致という人が衡山でこの碑の全文を写し、岳麓山に復刻した。

その後、明代に、長沙太守・藩鑑がこの碑を世に知らしめる目的で、復刻碑を各地に建てた。現在、西安碑林や紹興など中国各地の7ヶ所ほどに残されている。

いん国山めざして田舎道を



岳麓山の頂上近くにある禹碑亭



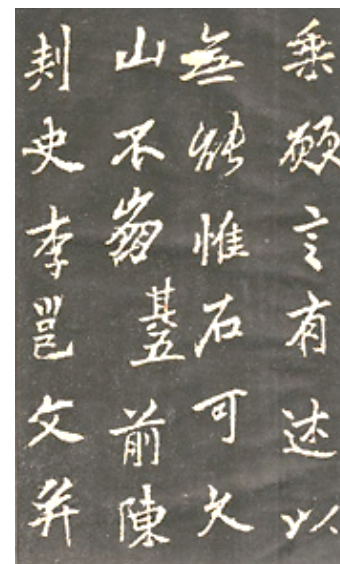
うひ
禹碑

南宋の嘉定5年（1212）に模写され、ここの崖に刻まれた。

碑文は9行、全文77字、幅140cm、高さ184cm。特異な字体である。

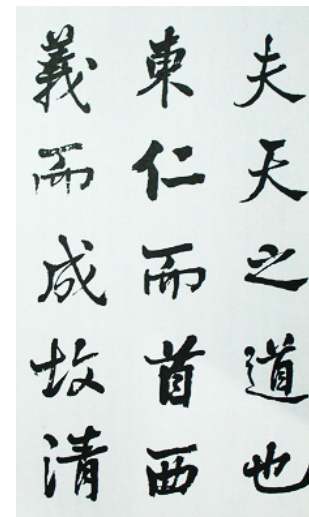
内容は夏を開いた禹王の治水の功績を讃えているものとされている。

岫巖碑、禹王碑、大禹功德碑などと呼ばれている。



麓山寺碑 宋拓 部分

28行、満行56字、現存1000余字。行書。剥落がひどい。「岳麓寺碑」ともいう。



何紹基の臨書 部分



麓山寺碑亭

岳麓書院の中に麓山寺碑はある。



麓山寺碑

唐の開元18年（730）建立。

李邕（678～747）の撰文と書丹。

江夏貴仙鶴刻とあるが、仙鶴とは李邕のことらしい。李邕は行書の名手で李北海とも呼ばれる。刑地に赴く途中の書らしい。

碑高は270cm、幅は135cm



活溪の碑林公園入口

碑林には唐代から近代までの摩崖碑が残されている。黄庭堅や何紹基、吳大澂の書もあるようだ。



入口を入り、細い石畳の道を行く



吾園と書かれた門をくぐって奥にどんどん行くと、湘江の岸辺に、「大唐中興頌」の碑亭があった。



耒陽西站から高鉄で衡陽へ。翌日（10月30日）朝早く、長距離バスで祁陽県活溪に向かう。長距離バスの終点から路線バスに乗り換えて活溪碑林公園へ。目的は顔真卿の摩崖石刻「大唐中興頌」を見ることである。



杜甫の墓

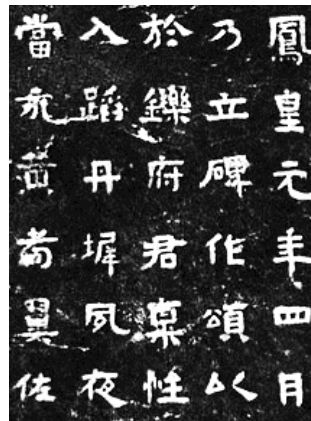
杜甫の墓は、耒陽一中（中学校？）の敷地内にあった。

晩年の杜甫は舟上生活をしながら流浪の旅をし、岳陽で「岳陽楼に登る」を詠んでから2年ほどで客死した。家族も貧しかったので、故郷に遺体を運ぶことができず、付近に埋葬されたという。耒陽の人は耒陽で死んだというが、杜甫の墓は中国の各地に8か所ほどもあるらしい。その一つがこの墓である。

耒陽市には杜甫公園もあり、その前に張飛の大きな騎馬像もあった。



谷朗碑 整拓



谷朗碑 拓本 部分
「谷朗碑」三国時代・呉の鳳凰元年（272年）の建立。碑文は18行、満行24字。碑高176cm、幅72cm。地元の官吏であった谷朗の墓碑。隸書と楷書の間代的書体である。



蔡倫之墓
紀念館の中に蔡侯祀もある。



蔡倫造紙作坊
この中に谷朗碑がある。



谷朗碑と紙漉きの道具類



谷朗碑
右が本物、左はレプリカ



耒陽市紙博物館

耒陽は紙の発明者といわれる蔡倫（後漢・50年？～121年？）の故郷である。

紙博物館の近くにある蔡倫紀念園の中の蔡倫紀念館には蔡倫の墓があり、また園内の蔡倫造紙作坊には紙漉きの道具と谷朗碑があった。



蔡倫紀念園正面



蔡倫紀念館（中に蔡倫之墓がある）

翌朝（10月29日）早く、衡山西站から高鉄で耒陽へ。目的は谷朗碑と蔡倫紀念館と杜甫墓を見学することである。耒陽は砂ぼこりに包まれた汚れた街で、瀟湘八景の影もなかったが、人は穏やかで、親切であった。



2013/11/1



2013/11/1

八大山人の墓



江西省博物館

廃墟のような博物館であった。書画作品はまったく無いとのこと。大きな恐竜の骨がひまそうに佇んでいた。無駄足だった。



2013/11/1



八大山人紀念館入口と郭沫若の額。見るほどの書ではないが参考までに。



2013/11/1

八大山人の書画の碑廊



2013/11/1

掛け軸が並んでいるが、レプリカと思われる。

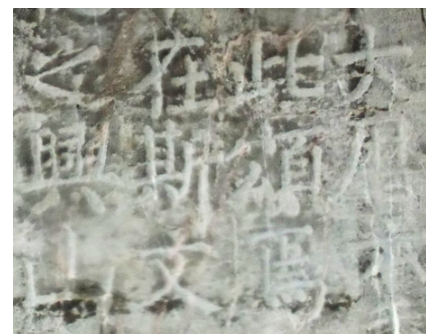
八大山人紀念公園は大変きれいで広い。その一角に紀念館はある。老人は無料。

しかし本物の作品はないようだし、訪ねて行くほどのところではなかった。

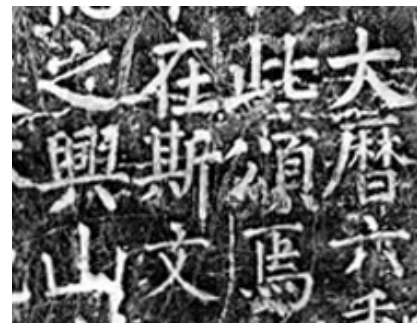
長距離バスで衡陽に戻り、翌日（10月31日）朝、寝台列車で南昌^{なんしやう}へ。右脚の痛みがひどくなってきた。右脚をかばい、なんとか最低限の目的を果たそうと決心するが、2年前の恐怖が頭をよぎり、そのとき疲労骨折した左脚もダメになるのではないかとという不安のなかで、毎朝目覚める日々がつづいた。ストレッチをして、ごまかしながらなんとか歩いたが、亀より遅い歩みだ。しかし、痛くても、可能な限り歩き続けるしかない。夕方南昌に着く。翌日（11月1日）八大山人紀念館と江西省博物館の見学だけにしぼって出発した。



だいとうちゆうこうしやう
大唐中興頌の前はガラス張り。



大唐中興頌 かろうじて見える部分。



大唐中興頌 部分 拓本

「大唐中興頌」 唐・大暦6年（771）
刻石 顔真卿書 元結撰 摩崖刻石
大字楷書 21行、満行20字

文の内容は、唐が安祿山の乱を平定して長安と洛陽を取り戻し、復興できた喜びを述べたもの。



碑亭（「三絶堂」と呼ばれている）



2013/10/30

側面から見た碑
高い岩壁に刻されている。



2013/10/30

碑亭の前にある湘江と祁陽湘江大橋



きれいな碑廊があった。



陶淵明の墓



踊る群衆とそれを見物する人びと
これは廬山市街だが、中国のあちこちで、踊ったり、歌ったりしている群衆を見た。「北国の春」の大合唱を上海の南京東路で聴いた。



バスを下りて、淵明路を東に歩いて行くと、そこに、道路に沿って細長く伸びた陶淵明記念館があった。



陶淵明記念館

陶淵明記念館は休館日であったが、偶然通りがかった若い館長が鍵を開けて中に入れてくれた。幸運ではあったが、しかし、たいした展示物もなく、わざわざ訪ねて行くほどのこともなかった。墓があったので墓参りをしにきたようなものであった。

館長に何か揮毫してくれと請われて、館長室に案内された。部屋には、すぐ書けるように筆墨や紙が用意されていた。

ぼくは餓えたように「我幸運也」と書いてしまった。反故として捨ててくれればいいのだが。

翌日（11月4日）廬山を下り、九江火車站に帰り、そこから鉄道で廬山駅に行き、廬山駅前から路線バスで陶淵明記念館に行く。

きねんかん
きゅうこう
ろざん
とうえんめい



パール・バックの像を発見！
廬山にはパール・バック家はじめ、多くの外国人の別荘があった。



2泊したホテル

今回の旅で一番楽しみにしていたのが廬山を肌で感じることであったが、廬山に出会うことができなかった。

足を痛めたことが原因なのだが、このような旅の仕方が間違っているのかもしれない。旅とはこんなものではないように感じた。本当の自然美に出会う旅について考え直さなければならない。



廬山山頂近くの別荘地帯。
ここにバスが着く。



石段を登り、数時間歩き回ってしまった。



急にガスが発生

南昌站から鉄道で九江へ。翌日（11月2日）九江火車站の裏側から出ている廬山行バスに乗り、あこがれの廬山に向かったが、登山は諦めざるを得なかった。ホテルも予約してあることだし、山の空気だけでも感じたいと思ったのである。しかし、廬山にかかわって暮らす人たちは、自然とは対照的に、殺伐とした人間性の持ち主のように感じられた。とにかくお金のかかる山であった。



南向きの書齋

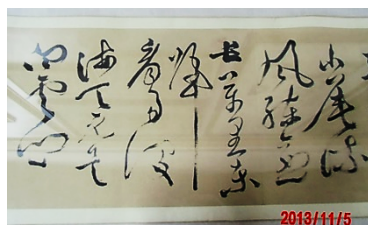
徐渭の肖像画や文房具や陳鴻寿の扁額などが置いてある。陳鴻寿は2年間ここに住んだことがあるらしい。



隣の部屋。徐渭の書画のレプリカなどが展示されている。



北側にも狭い庭があり、小さな井戸があった。



徐渭書「草書白燕詩手卷」部分



青藤書屋の庭 奥に住居がある



左側に天池と呼ばれる池がある。右側が書齋。



「天池」奥に青藤が見える。

徐渭（明・1521～1593）は青藤が好きで、青藤という雅号もあるほどである。

紹興の人たちは感じの良い人が多かった。優れた人物が多く出ているのも、そういった風土だからかもしれない。

路線バスで紹興站まで戻り、青藤書屋へ行く。青藤書屋は、紹興出身の徐渭の旧居である。狭いが、典型的な文人の庭園式民居で、竹林、小道、築山などがある。石とレンガ造りで平屋、2部屋。徐渭の墓も紹興市郊外にある。



これも碑亭（「蘭亭」と刻まれた碑がある）



碑亭の中の「蘭亭」康熙帝の筆という。蘭亭は剥落していた。

20数年前きたときより土産物店は増えていたが、何か色あせて見え、初めて来たときほどの感動は感じなかった。

353年（永和9）ここで王羲之が蘭亭序を書いたとは思えなかった。



王右軍祠



王右軍祠の中の墨華亭と回廊
20数年前ここに来た時は、日中の書家たちが、揮毫大会のようなことをして、騒がしかったなあ。



流觴亭の前にある曲水の宴の場所



御碑亭

大きな蘭亭序の碑がある。康熙帝の書。碑陰は乾隆帝の詩と書らしい。



蘭亭は紹興站前から路線バスで30～40分ほどの紹興市の郊外にある。



蘭亭の入口の門



門をくぐって、竹林の小径を行く



鵞池碑亭

「鵞」は王羲之、「池」は王献之が書いたらしい。

廬山站まで戻り、寝台列車で杭州東へ。11月4日は列車泊（10時間ほどかかる）。杭州東から乗り換えて、紹興へ。11月5日、脚の痛みがひどいので、紹興では予定を縮小して、蘭亭と青藤書屋だけにして、大禹陵や王羲之故宅、魯迅記念館、魯迅故居などはあきらめた。